

# 軽度発達障害児に対する保育所での保育における支援および困難に関する調査研究

An investigation about support and difficulty in nursery school  
for the slight development handicapped child

細川 かおり\*

Kaori HOSOKAWA

## 1. 目的

近年多くの保育所に高機能自閉症やアスペルガー障害、ADHDなどの軽度発達障害児や軽度発達障害を疑われる子どもが入所している。保育の現場ではこうした子どもたちへの保育の方法や支援について多くの悩みが聞かれるが、保育士は巡回相談等や研修等に参加して得た知識を保育に取り入れながらよりよい保育をしようとしている。細川(2009)は統合保育における保育士の支援、配慮等について検討したが、本研究では特に近年その保育方法が課題となっている軽度発達障害児や軽度発達障害を疑われる子どもに対して、子どもの状況と保育士の保育の中での支援や配慮等および困難に感じていることについて検討した。

## 2. 方法

### 1) 対象

障害児保育のセミナーへの参加者を対象に、アンケートへの協力を求めた。なお、このセミナーへの参加対象は5年以上の保育経験のあるK県内の保育士であり、セミナーの内容は軽度発達障害をテーマにしたものであった。83名から回答を得た(有効回答数79名)。このうち、担当クラスの障害児に高機能自閉症などの軽度発達障害および軽度発達障害を疑う子どもがいないと回答した者(40名)を主に分析した。

### 2) 調査内容

障害児のいるクラスを担当したときのことを考えながら回答してもらった。内容は担当したクラスの概要、保育をするうえでの支援や配慮、困難だったことや悩んだこと、効果があったところ、利用した専門機関、今後欲しい情報や支援等であった。

## 3. 結果と考察

### 1) 全体の概要

まず79名の回答の分析から全体の概要について述べる。

担当クラスの障害児は182名おり、内訳は表1の通りであった。全体では、知的障害のある自閉症と高機能自閉症、アスペルガー障害などの知的障害のない自閉症が多かった。平均すると、1クラスに障害児は2.2名在籍することになる。この182名のコミュニケーションの程度(表2)は「ことばは十分に話せるが、会話は十分ではない」が31%と最も多かった。ことばでのコミュニケーションができる子どもも26%いた。「ことばはほとんどない」「単語、2-3語文」などことばでのコミュニケーションが難しい子どもは38%いた。集団参加の程度を聞いたところ(表3)、「およそ参加できる」が52%おり、「ほとんど参加できない」が36%いた。

これらから、担当クラスには多くの場合複数名の障害児

表1 子どもの障害のタイプ (人/%)

自閉症、自閉傾向で知的障害がある	70	38%
高機能自閉症等、知的障害がないが落ち着きがない	63	35%
知的障害 ダウン症	31	17%
肢体不自由	7	4%
その他	11	6%
計	182	100%

表2 コミュニケーションの程度 (人/%)

ことばはほとんどない	26	14%
単語、2-3語文	44	24%
ことばは十分に話せるが、会話が十分でないときがある	57	31%
ことばでのコミュニケーションができる	47	26%
その他	8	4%
計	182	

表3 集団参加の程度 (園/%)

およそ参加できる	94	52%
時々参加できる	11	6%
ほとんど参加できない	66	36%
全く参加できない	6	3%
その他	5	3%
計	182	

\* 〒230-8501 横浜市鶴見区鶴見2-1-3 鶴見大学短期大学部保育科

Department of Early Childhood Care and Education, Tsurumi University of Junior College, 2-1-3 Tsurumi, Tsurumi-Ku, Yokohama 230-8501, Japan.

が在籍しているといえる。そのコミュニケーションのレベルは、子どもの障害種類や程度が関係していると思われる。集団参加については、半数が「およそ参加できる」と回答している。これをコミュニケーションのレベルと照らし合わせると、ことばでのコミュニケーションが十分でなくても「およそ集団参加できている」子どもがいるということになる。これは集団に基盤をおいた保育における保育士の指導の積み重ねの結果と考えられる。また、コミュニケーションの力とは別に子どもの「集団に参加する力」が想定され、これが保育を通して育ってきていると考えられる。

## 2) 軽度発達障害児のいるクラスの概要

軽度発達障害児および、軽度発達障害を疑う子どもがいると答えた40名の回答を分析した。担当クラスの年齢（表4）は2歳児から5歳児であり、4歳児13クラス（33%）、5歳児10クラス（25%）であった。担当クラスの園児数を表5に示したが、園児数は16名から25名が最も多く、平均人数は20.7名であった。担当クラスの障害児数（表6）は1名から7名までの間にあり、最も多いのは1名（10クラス、25%）、次いで2名、3名（それぞれ9クラス、23%）となっていた。クラスが所属する園全体の園児数は60名から120名が23園（58%）と最も多く、120名以上の園は8園であった（表7）。

担当クラスの障害児のうち「高機能自閉症、アスペルガー障害などの軽度発達障害、知的障害がないが落ち着きがない」タイプ（以下、軽度発達障害児とする）は63名いた。軽度発達障害児のコミュニケーションの程度および集団参加の状況について質問したところ、集団参加の状況（表8）は「およそ参加できる」が38名（60%）、「ほとんど参加できない」が20名（32%）で、「全く参加できない」が2名（3

%）であった。コミュニケーションの状況（表9）は「ことばは十分話せるが会話が十分でない」28名（44%）、「ことばでのコミュニケーションができる」27名（43%）がほとんどであった。

軽度発達障害児のみでもクラスに複数名の障害児がいるクラスが3/4あった。特に4、5歳児クラスに多く在籍しているが、これは4、5歳児になると落ち着きがないなどの行動が目立ってくるなど障害特性が顕在化してくることや、この時期に診断がつく子どもがいるなどで多くなると考えられる。コミュニケーションについては、ことばでのコミュニケーションができる、またことばは話せるが会話にならないがほとんどであり、これらは軽度発達障害の障害特徴と合致している。集団参加については、「およそ参加かできる」と「ほとんど参加できない」に分かれていた。軽度発達障害児は集団活動への参加を苦手とするという特徴があるが、保育士の日々の保育の中での指導の積み重ねや、並行通園などによる障害児通園施設などでの指導により、「およそ参加できる」ようになってきていると考えられる。

## 3) 支援・配慮したこと、困難なこと

軽度発達障害児に対して保育をするうえで支援、配慮したことおよび保育をするうえで困難だったことを選択してもらった。軽度発達障害児に対して保育をする上で支援、配慮したこと（複数回答）を表10に示した。平均5.8項目選択されていた。そのうちもっとも多い項目は「園内の職員間の連絡、連携」（73%）「親とのかかわりや連携」（73%）であった。次いで「コミュニケーション支援」（68%）「問題行動、不適応行動への支援」（65%）「友だちとの関係への支援」となっていた。その他として記述されていたもの

として「環境の変化に弱いので、空間的、人的、時間的に大きく変わらないようにした」「視覚的な指示をするようにした」「個別の環境を用意した」などがあつた。

保育をする上で困難だったこと、悩んだことを選択してもらった結果を表11に示した（複数回答）。平均3.8項目選択されており、内容は「親との関わりや連携」（68%）「問題行動、不適応行動への支援」（63%）「一斉の活動」（53%）となっていた。

以上の結果をみると、保育士が最も配慮したことが「園内の職員間の連絡、連携」であったことは興味深い。子どもに對することよりもまず職員間の連携や親とのかかわりに配慮して保育を進めてい

表4 クラスの年齢（園／%）

1歳児クラス	0	0%
2歳児クラス	4	10%
3歳児クラス	9	23%
4歳児クラス	13	33%
5歳児クラス	10	25%
未記入	4	10%

表5 クラスの人数（園／%）

10名まで	1	3%
11名～15名まで	7	18%
16名～20名まで	12	30%
21名～25名まで	10	25%
26名～30名まで	9	23%
31名～35名まで	1	3%

表6 1クラスの障害数（園／%）

1名	10	25%
2名	9	23%
3名	9	23%
4名	7	18%
5名	3	8%
6名	0	0%
7名	1	3%

表7 園の園児数（園／%）

およそ60名まで	9	23%
およそ60名～120名	23	58%
およそ120名～180名	7	18%
およそ180名～240名	1	3%
240名以上	0	0%

表8 集団参加の程度（園／%）

およそ参加できる	38	60%
時々参加できる	3	5%
ほとんど参加できない	20	32%
全く参加できない	2	3%
その他	0	0%

表9 ことばでのコミュニケーションの程度（人／%）

ことばはほとんどない	1	2%
単語、2～3語文程度	5	8%
ことばは十分話せるが、会話が十分でないときがある	28	44%
ことばでのコミュニケーションができる	27	43%
その他	2	3%

ることが明らかになった。園内の職員間の連絡、連携は障害児保育の質を保証するために保育士が重要視している要因である（細川、2009）。例えば園庭での自由遊びや他のクラスに行ってしまった時に他の保育士がかかわるといったことは日常的にあることであり、子どもの理解を一致させかかわり方を共有することは必要なことである。担任だけが抱え込まずに園全体の体制を整え障害のある子どもを保育していけることは、障害児保育の質とも関係すると考えられる。本研究からも保育士が職員間の連携や連絡が重要であると認識し、最も配慮していることが明らかになった。

「親との関わりや連携」についてはもっとも配慮してたことであり、同時に困難であったこと、悩んだことでもあった。乳幼児期は親の庇護のもとで育てられ、子どもへの働きかけも親を通して働きかけなくてはならないという特性を考えると、親と協力して子どもの保育を進めたいと保育士が考えるのは当然のことである。しかし、乳幼児期は障害が発見される時期であり親にとっては子どもの障害をどのように受け止めていくかが課題となる時期である。このなかで軽度発達障害の診断がつくのは多くの場合4、5歳以降になる。親にしても3歳児健診までに特に何もいわれていなかったり、家庭のような1対1の場面ではそれほど子どもに問題がなく、またことばや知的発達に問題がないと、親も子どもに問題があったりするとは考えないであろうし、ましてや障害があることは受け入れられないことであろう。集団場面で問題を示すという軽度発達障害の特徴を考えると、保育士のほうが先に障害に気づくであろうから、保育士と親との間に認識の差があることは当然であろう。そもそも親が「障害」を受け入れることは非常に長い時間がかかることであるため、親との関わりや連携は大きな課題であることは想像できる。「親とのかかわり」は最も困難な課題とも考えられ、軽度発達障害児の「親への支援」、「保育士の親への支援のための支援」が、様々な形で求められるのではないだろうか。

子どもに対するものでは、「問題行動、不適応行動への支援」が配慮したこととしても困難なこととしてもあがっ

ていた。保育士が「問題行動や不適応行動」について悩んでいることは先行研究でも指摘されている（例えば、平澤ら、2005）。これらについては、巡回相談や研修が大きな役割を果たすと考えられる。

また、配慮していることとして「コミュニケーションの支援」「友だちとの関係の支援」があったが、これは保育所が健常児と一緒に集団を基礎に障害のある子どもを保育、教育し、発達を促していることが背景にあるためと考えられる。幼児期の学びは遊びを通して行う。他児とのかかわり遊ぶことを通して学習や発達が期待されているため、友だちとの関係をつくるような支援がなされていると考えられる。特に他害など相手から好まれない問題行動がある場合もあるため、障害特性に配慮しながらクラスの友達関係が維持されるような支援をしていると推測される。また、ことばは話せるが会話が難しいといった特性を持つ軽度発達障害児に対して、他児とコミュニケーションがうまくいくような支援をしていると考えられる。

「一斉活動」も困難だったこととしてあがっているが、軽度発達障害児は集団での活動に参加することに最も課題があるという特徴があるため、一斉活動への参加をさまざまに指導するが結果として困難であったり、その指導方法に悩んだと推測できる。どのように指導すれば一斉活動に参加できるのか、また一斉活動をどのような内容にし、どう組み立てれば軽度発達障害児も含めて参加できるのか研究が望まれる。

さらに、「特に悩んだことを具体的に教えてください」として自由記述を求めた。これを分類した結果を表12に示した。多いのは「その子どもへのかかわり方」「親の理解、親とのかかわり方」であった。具体的には「子どもの状態について認識のない親に対する対応」や「対象となる子どもへのかかわりかた」などであった（表13）。

一方、「保育を通して伸びたところ、保育の効果はどんなところにあったか」を自由記述してもらった結果を分類し、表14に示した。その結果「集団の中で経験が広がる、集団参加」「友だちへの意識がもてた、友だち関係」についての内容が多かった。中には「個別の場を用意して落ち着いた

表 10 保育の中で特に配慮、工夫していたこと（園／％）

項目	人数(%)
保育内容、カリキュラムの工夫	10 25%
一斉活動の工夫	23 58%
遊びが発展するための工夫	7 18%
コミュニケーションの支援	27 68%
身辺自立の工夫、支援	14 35%
友達との関係への支援	25 63%
教材、教具、遊具など	9 23%
クラス、園内の環境設定	19 48%
行事参加、行事の工夫	11 28%
問題行動、不適応行動への対応	26 65%
園内の職員間の連絡、連携	29 73%
親とのかかわりや連携	29 73%
その他	4 10%

表 11 保育をする上で悩んだこと、難しかったこと（園／％）

項目	人数(%)
保育内容、カリキュラム	5 13%
一斉の活動	21 53%
遊び	3 8%
コミュニケーション	14 35%
身辺自立	9 23%
友達との関係	18 45%
教材、教具、遊具	2 5%
クラス、園内の環境設定	4 10%
行事参加	9 23%
問題行動、不適応行動への対応	25 63%
クラスの運営	9 23%
園内の職員間の連絡、連携	6 15%
親とのかかわりや連携	27 68%
その他	0 0%



表 12 特に悩んだこと (人)

項目	全体	軽度発達障害児
1. クラス運営について	10	6
2. 遅れかどうか判断できない	2	0
3. 親の理解、親とのかかわり	31	23
4. 落ち着きがない子どもに、他児がひっぱられる	1	1
5. その子どもへのかかわり方	38	29
6. 友だち関係	4	2
7. 他児のその子どもへの理解	10	7
8. 外部機関に関すること	2	0
9. 行事	2	0
10. 職員体制・連携	7	6
計	107	74

表 13 特に悩んだことの自由記述例

1	2人違うタイプの子がいることで、Bを傍らに座らせということが多く、積極的に保育できなかった
3	Aちゃんは現在も保護者が認めておらず、良い保育をするための協力体制をつくるのが難しかった
3	健常児の保護者対応が難しい
5	物投げのような突発的行動について、いかに未然に防げるか
5	タオル掛けのような大きな物を倒す、なぐる、ける、ひっかく
5	社会的ルールを教えるのが難しく、ご褒美があるから頑張ろうということは通用しない
8	他児との関係で、○○ちゃんばかりずるいという声もある

表 14 保育を通して伸びたところ・  
保育の効果があったところ (人)

項目	全体	軽度発達障害児
1. 生活の流れを理解できた	1	0
2. やろうとする気持ちが出て、自信がついた	1	0
3. 友だちへの意識がもてた、友だち関係	8	6
4. 保育士との関係	4	3
5. 身辺自立	6	4
6. 集団の中で経験が広がる、集団参加	12	6
7. 問題行動の軽減	3	2
8. ことばが伸びた	8	4
9. 個別指導が有効だった	3	1
10. 社会性が伸びた	1	2
11. 通常発達の子どもが成長した	5	1
12. 遊びが広がった	2	2
14. 食事が改善された	2	2
15. その他	2	2
計	58	34

環境で取り組めるようにしたことで、制作などでもできたという達成の経験をつむことができた」「その子どもにとってわかりやすい環境を作るようにしたところ、自分で行動できるようになり、友達からも認められ自信がつき、結果、攻撃的な面が少し治まった」という記述もあった(表15)。

担当クラスの年齢による支援・配慮項目数、困難項目数の違いについて検討したところ、困難項目数については3歳児、4歳児、5歳児と担当クラスの年齢があがるに従い増加する傾向にあった。5歳児に困難項目数が多いのは、次第に活動が複雑になるため困難な部分が生じてくるのではないだろうか。また、1クラスの障害児の数と支援・配慮項目数、困難項目数について検討したが、有意差はみられなかった。クラスの障害児の数と困難項目数に有意差がみられなかつ

表 15 効果があったところの自由記述

3	苦手な活動も友だちと一緒になら取り組めるようになった
3	友だちとのトラブルの時、手を出すのではなく、保育士を頼って状況を伝えてくれることが増えた
3	他児とごめんなどの共通言語ができ、子ども同士での解決が増えた
6	少しずつ友だちとの関係を深めていき、最近では落ち着いて集団の中に入っていられるようになった
6	初めての場への苦手意識が軽減した
7	波はあるものの、衝動的行動が少なくなっている

表 16 巡回相談、研修会等の利用 (園／%)

項目	人数(%)
研修で知識を得た	16 40%
巡回相談の活用	21 53%
外部の機関との連携	1 3%
特に利用していない	2 5%

たのは、保育士の加配等関係するとも考えられるが、今後検討が必要である。

#### 4) 巡回相談、研修会等の利用について

保育をするにあたり巡回相談の活用は21クラス(53%)、研修で知識を得たは16クラス(40%)あった。特に利用していないは2クラス(5%)のみであった。今後欲しい支援(自由記述)としては「巡回相談の回数の増加」「保育現場にあわせた対応策」などであった(表16)。

#### 4. まとめ

園内の職員間の連絡、連携は統合保育の成否に関わることであり、保育士はもっとも配慮していることであった。また「親とのかかわりや連携」は最も配慮していることと同時に最も困難なことであった。「親とのかかわり」や保育士と親とのかかわりを様々な形で支援することが必要ではないだろう。

「コミュニケーション支援」「友だちとの関係への支援」への配慮や、「一斉活動への参加」を困難であるとしたことは、軽度発達障害児の障害特徴と合致していると考えられる。保育は「クラス」という集団を基礎にして、健常児も障害児も一緒に保育することによって発達を促している。したがって、集団の中で双方が参加できる一斉活動をどう組み立てていけばよいか、集団のなかでのコミュニケーションや友達との関係の支援方法など、障害児と健常児を同じ集団で共に保育する方法そのものについて、今後検討される必要があるだろう。

「問題行動、不適応行動への支援」など個への配慮の方法については、巡回相談の役割が大きいと考えられる。巡回相談も含めた地域資源については地方自治体によって異なっており、巡回相談にしてもかなり利用できている地域もあれば、もっと回数を増やして欲しいという要望がある地域もある。どの地域にいても十分に利用できるようになることは課題と考えられる。

## 文献

- 1) 平澤紀子、藤原義弘、山根正夫 (2005) 保育所・園における「気になる・困っている行動」を示す子どもに関する調査研究－障害群から見た当該児の実態と保育者の対応および受けている支援から－. 発達障害研究、25(1)、50-61.
- 2) 細川かおり (2009) 統合保育得における保育士の保育、支援・配慮に関する実態調査－中堅以上の保育士への調査を通して－. 鶴見大学紀要46(3) 保育、歯科衛生編、93-100.
- 3) 中村哲雄 (2003) 障害幼児の統合保育上の課題－保育士へのアンケート調査より－. 琉球大学教育学部障害児の教育実践センター紀要、5、67-69.

